

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：37304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720197

研究課題名(和文) 通訳ノートにおける発話理解の認知語用論的研究と実証

研究課題名(英文) Note-taking in consecutive interpreting: From theory to application

研究代表者

南津 佳広 (Minamitsu, Yoshihiro)

長崎外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70616292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人間のコミュニケーションの成立過程の本質の一端を明らかにすべく、逐次通訳における通訳ノートを分析した。

そこで、通訳ノートを用いる逐次通訳の成立プロセスを協力モデルの枠組みから考察し、実験を行い、認知語用論の観点から検証した。聴取局面では、原発言の一般的な概念表示に動機づけられた意味論レベルで処理しており、最小命題の主要素を構成する概念表示の断片を構造化して通訳ノートに表記していることがわかった。また、訳出局面では、通訳ノートの表記をもとに通訳者が曖昧性除去や、アドホック(状況に合わせて調整した)概念構築、飽和、自由拡張といった語用論操作を行って訳出していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the process of human communication through nota-taking in a consecutive interpreting. To investigate of this, the research first discussed a theoretical framework with reference to the cooperation model. Then it conducted the consecutive interpreting experiment to show whether the way and content of notation have some roles, or not. Nine practitioners participated in it, and the material was three minute's interview. With scrutiny of data, the result showed they notate minimal proposition using abbreviations and symbols gained from their practical experiences, and notation consisted logically. Based on this, they not only produced explicatures through pragmatic heuristic and pragmatic processes, including disambiguation, ad-hoc concept construction, saturation, and free-enrichment, but also delivered implicatures. In sum, the notation could partially visualize mental representations produced at the process of a human communication.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：通訳学 認知語用論

1. 研究開始当初の背景

日本では、外国語教育の一環として通訳関連科目を設置する大学が増加傾向にある。通訳関連の授業を設ける大学が増えてきた理由については、多くの要因が考えられるが、そのひとつに「従来の英語教育の不満と、これを補完するものとしての通訳教育への期待」(染谷 2010)がある。

一方、欧米諸国では、近年、ILT (Interpreting in Language Teaching)として通訳が本質的な意味での言語能力の養成に大きく貢献する可能性をもった分野であると、再認識されつつある (Cook 2010, Malmkjer 2004, Campbell 1998)。

ILT とは、通訳訓練を通じて、学習者の「言語運用能力」・「異文化コミュニケーション能力」・「メタ言語能力」の3つに強く働きかけるものである。その流れを受け、国内でもILTを推進する機運が高まっている。

日本における通訳教育は、比較的新しい分野であるため、通訳教育をめぐる理論的な基盤の不備、および体系的な教育法の欠如の2点に集約される。また、現在、大学・大学院で通訳教育に携わっている教員の殆どが、民間の通訳者養成機関(職業訓練機関)を経て現場を踏んだ実務経験者であるため、授業内容は教員個人の実務経験に基づいたものになってしまい、他分野に見られるような理論的基盤に基づいた教育は行われていない。今後、日本において通訳を学問として発展させ、社会的な認知を得るためには、まず、通訳教育における基礎理論の研究と教授法の整備が急務である。

そこで考えなくてはならないのが、ヒトはなぜ通訳を介して異文化間のコミュニケーションをはかることができるのかという本質的な問題である。これまで、通訳者に求められる固有の技能や、記憶など心理学からのアプローチ、言語哲学を基盤とした発話理解からのアプローチから研究が数多く行われてきた。しかし、コミュニケーション行為の本質から通訳を分析する試みはまだ数が少ない。

2. 研究の目的

本研究では、通訳行為の基礎となる逐次通訳に的を絞り、その中核をなす、ノート・テーキング(通訳ノート)に焦点を当てる。そして、通訳ノートのメカニズムとそれを可能にする能力について検証する。

逐次通訳を行うに当たり、通訳ノートは欠かすことのできないにも関わらず、国内外では通訳者個人の直感や実務経験から、SLを手がかりに略字・記号を用いて視覚的にわかりやすく表記することを主張されてきた (See: Rozan 1956, Миньяр-Белоручев 1969, Msytseck 1989, Jilles 2005)。しかし、その表記内容・表

記方法に関しては通訳者個人の直感や実務経験を支えるものは何なのか。この点に関しては、既存の研究ではほとんど踏み込んでおらず、不明瞭なところが多い。

そこで、本研究では通訳コミュニケーションが成立する理論的基盤を考察し、その考察結果をもとに、通訳ノート付きの逐次通訳の実験を行った。逐次通訳における通訳ノートを分析することによって、ヒトの発話解釈過程を可視化することができ、ヒトのコミュニケーションの成立過程の本質の一端が明らかになるのではないだろうか。

3. 研究の方法

(1) 通訳コミュニケーションの理論的基盤
ヒトはどのような起源からコミュニケーションをできるようになったのだろうか。トマセロは、“the shared intentionality infrastructure (共有志向性の基盤)”に由来している”the cooperation model(協力モデル)”を主張している (Tomasello 2008)。その「協力モデル」の成立させる要因にはさまざまなものがあるが、主要なものとしては、伝達を行うためにヒトは①共同の意図を作り、必要に応じて相互調整を行う、②共同注意とその状況の共有理解に基礎を置く、そして③参加者の共有の想定のもとで伝達を行うからだという。つまり、コミュニケーションを協力的に構造化しているから伝達が成功しうるのである。

もしこの主張が正しいのであれば、通訳コミュニケーションにおいても、原発言者・通訳者・聞き手の間で協力的に構造化し、何かしらの共有志向性の基盤を構築しているはずである。そこで、本研究では、逐次通訳を用いて、上述した三者間で通訳を介するテーマにもとづいた話し合いの共有志向性の基盤を構築していると考えた。また、逐次通訳で用いられるコミュニケーション手段は、コード化された原発言 (SL) と通訳ノートに用いられる表記である。異なるコードの慣習、つまり言語体系を超えて通訳コミュニケーションを成立させられるのは、原発言者・通訳者・聞き手の間に共同注意が働き、その状況の共有理解が行われているからだ結論づけた。

(2) 通訳ノート付きの逐次通訳の実験

本研究では、上述した理論的基盤をもとに、通訳ノートにおける表記内容・表記方法は何に動機づけられているのか、また、表記を手がかりにどのように訳出しているのかを明らかにするために実験を行った。

本研究の協力者は10年以上の実務経験のあるプロの通訳者9名である。実験素材には、VOAに出演したアウンサン・スーチーへのインタビューの冒頭の3分とした。実験方法は下記の通りである

- ① 通訳ノート付きの逐次通訳を行ってもらい録音・録画する。
- ② 表記内容・表記方法と訳出をもとに協力者に内省してもらおう。

本論では、逐次通訳の実験をもとに、SL、通訳ノートの表記、訳出をデータ化し比較検証をおこなった。通訳者がSLを手がかりに、どのように表記し、その表記を元に訳出しているのかを分析することで、発話の理解、そして発信へとむかうプロセスの一端を明らかにすることができるかと仮定したからである。

4. 研究成果

(1) 表記内容

実験の結果、その略語・記号は、経験則に基づくとはいえ、基本的にSLを構成する単語があらわす概念で、特定の対象への言及を含まない意味表示の断片を表記しているものが多い。これは、語彙的・構造的な曖昧性を持たない概念を通訳者がコード化したものと言える。例えば、実験のSLで出てきた”the Constitution”や”the Army”を、その指示対象を特定して表記するのではなく、そのスペルの断片を表記するか、辞書的意味表記に相当する日本語を表記していた。

このことから、逐次通訳における通訳ノートの表記内容は、通訳者個人の直感や実務経験から略字・記号が用いられている。だが、その略字・記号は通訳者が聴取したSLの一般的な概念表示に動機づけられていることが分かった。さらに、通訳者はこの表記内容を元に語用論操作を行い、訳出を行っていることが明らかとなった。

(2) 表記方法

では、表記方法の点ではどうだろうか。確かに個人差があるものの、決してアトランダムに表記しているわけではなく、法則性があることがわかった。

通訳者はSLを手がかりにして、原則的にSLから真偽判断可能な最小命題を作り上げて、いくつかのユニットにまとめて表記していることが明らかとなった。

最小命題をどこまで積み重ねるかは、通訳者の実務経験値と通訳者個人の記憶が飽和しないようにバランスをはかった結果と言えよう。

では、そのユニットの中身はどのようになっているのだろうか。まず、紙をどのように使うにせよ、下図1のように、ユニット内で表記する際にはインデントを付けて左斜め上から、右斜め下へ表記していることである。

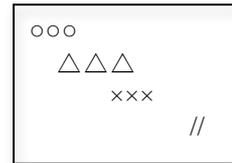


図1. 通訳ノートのユニット構造

この表記法は、原則的に Rozan (1956) の提唱した表記方法に則ったものである。これは、通訳者が表記内容を振り返りて訳出する際に、視線を動かすことなく一目で把握することができ、効率良く訳出できる経験に則ったものといえよう。

(3) 訳出

逐次通訳者がどのように原発言を聴取・分析してノート・テーキングの際に表記するかについて考察を進めてきた。表記内容・表記方法に関しては、通訳者は原則的に原発言の言語形式をもとに最小命題を作り、その最小命題を構造化して表記していることがわかった。ここまでは、いわゆる意味論レベルの処理である。

ところが、訳出局面では、通訳ノートの表記内容とは異なる訳出をしている箇所が散見された。これは、通訳者が表記内容を手がかりに語用論操作を行い、認知語用論の枠組みで言う表意を作り出して、聞き手にあわせて訳出していると考えられる。

ここでいう表意とは、当該の発話の言語使用状況の中で作り出されたその発話の意味である。つまり、言語形式から得られた意味概念を元に、語用論的操作を行い、当該の状況で聞き手にとって関連があると認められた解釈が得られた段階で語用論的操作を止めた結果産出されるものである。この語用論的操作には、①曖昧性除去、②アドホック概念構築（当該状況に見合うように調整されたその場限りの概念）、③飽和化、④自由拡張の4種類の操作が行われる。聞き手にあわせて訳出を行うことを考えれば、①の曖昧性除去と②アドホック概念構築は、通訳行為では自明のことと言えよう。本研究で取り扱うのは③の飽和化と④の自由拡張である。

そこで、③の飽和化と④の自由拡張に焦点をあて、通訳者が通訳ノートを手がかりに、どのように語用論的操作を行い、訳出しているのかを考察する。

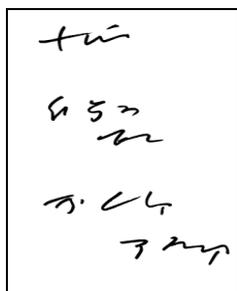
飽和とは、語彙概念の制約を受けて、当該表現のそのスロットに文脈情報補い、表意を構築するプロセスである。そこで、⑤を見ていただきたい。

- ⑤ [SL] I think it's time we tried to stand on our

own and I've been very grateful to the United States for what they've done to help the forces of democracy.

これに対する通訳ノートは⑥の通りである。

⑥



⑥の表記内容を手がかりに、逐次通訳者は⑦のように訳出している。

⑦ [TL]もうそろそろビルマが自分の足でしっかりと立てるようにするべきだと思います。アメリカには大変感謝しております。民主化プロセスを進める上で、制裁は役に立ったと考えております。

ここでアウンサン・スーチーは、“think it's time we tried to stand on our own and I've been very grateful to the United States for what they've done to help the forces of democracy.”と述べている。問題は、“What they've done”の箇所である。その発言を受けて、通訳者は⑥のように表記している。この“What they've done”は⑧のように、語彙概念にスロットがある。

⑧ what they_x have done_y

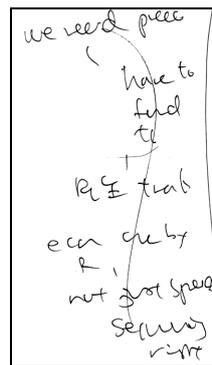
通訳者は文脈を手掛かりに、“they”のスロットに対してはアメリカを充てることで満たしている。後者の“done”の場合、2003年にアメリカが対ミャンマー制裁法を制定したことを当該の通訳者は知識として獲得していたのであろう。そこで、“done”のスロットに対ミャンマーの経済制裁を充てたとみられる。その結果、“What they've done”を「制裁」と訳したと考えられる。

次に、自由拡張について述べる。自由拡張は、飽和とは異なり、純粋な語用論操作である。ここでは、語彙概念の制約を受けることなく、聞き手自身が文脈概念から情報を付け足すことによって、表意を構築する作業である。そこで、⑨を見ていただきたい。

⑨ [SL] We need to just go on with the process. We need to find out what we have to do in order to keep the democratization process on track.

この⑨に対して、通訳者は⑩のように通訳ノートで表記している。

⑩



⑩の表記を手がかりに、逐次通訳者は⑪のように訳出している。

⑪ [TL] このプロセス...現在のプロセスを続ける必要があります。何をすべきか、模索する必要があります。で、民主化の動きを軌道に乗せるということです。

原発言では、司会者が“Political and economic reforms in Burma are clearly not yet complete. What needs to happen next?”と聞いている。それに対して、アウンサン・スーチーは、⑨の通り“We need to just go on with the process. We need to find out what we have to do in order to keep the democratization process on track.”と答えている。

問題は、アウンサン・スーチーがいきなり述べた“the Process”である。アウンサン・スーチーにとっては、この表現の指示対象を想定していたのかもしれない。しかし、通訳者は、文脈情報からその指示対象を同定することができない。通訳者は⑩に“Process”とはっきり表記している。

この語彙概念では、冒頭から出ていることを考えるなら、“the process”の語彙概念のスロットに何を埋めるべきか、この時点では曖昧である。さらに、通訳者に文脈情報は何も提供されていない。したがって、通訳者自身は⑩の通り、「このプロセス...現在のプロセス」と、「この・現在の」を付け足し、“process”が持つ、特定の対象への言及を含まない意味表示を膨らませることで、解釈を聞き手に委ねて訳出している。

このことから、訳出局面で逐次通訳者はSLの語彙概念の制約と通訳ノートの表記をもとに語用論的操作を行って訳出していることが明らかとなった。

(4) まとめ

本研究では、通訳の理論的基盤を構築し、通訳ノートを用いる逐次通訳の実験を行って、通訳ノートのメカニズムとそれを可能にする能力について分析を行った。通訳の理論的基

盤はトマセロのいう協力モデルの枠組を参照し、通訳ノートのメカニズムとその動機付けは、認知語用論の知見を参照して分析を行った。

その結果、これまで通訳者個人の直感と実務経験から得られた略字や記号を用いると述べられてきた通訳ノートの表記内容・表記方法は、通訳者が聴取した原発言の一般的な概念表示に動機づけられた意味論レベルの処理段階であり、その表記内容は最小命題の主要素を構成する概念表示の断片を構造化して表記していることが分かった。

また、訳出局面では、通訳ノートの表記をもとに通訳者が語用論操作を行って訳出していることが分かった。この語用論的操作を可能にさせるのは、協力モデルでいうコミュニケーション参加者間の共有志向性が大きな役割を果たしていることを主張した。逐次通訳の研究は、これまで通訳教育に関するものが多かったが、逐次通訳を可能にさせる原理に焦点を当てることで、逐次通訳の研究に新たな光を当てることが可能となり、逐次通訳研究の裾野を広げることが出来る。

また、通訳ノートを用いた逐次通訳研究は、人間の言語理解だけではなく発話の産出局面にも応用可能である。なぜなら、これまで意味論や語用論で記述されてきた、人間が聴取・理解した概念表示をノート・テーキングの表記によって可視化すること出来るからである。ただし、そこには今後考察すべき問題が豊富にあり、さらなるデータ収集のもと検証をすすめなくてはならない。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

- ① 南津佳広「通訳理論研究の視点(特別寄稿)」日本通訳翻訳学会通訳教育指導法研究プロジェクト『通訳教育論集』(査読無) 2014年4月 pp.99-101
- ② 南津佳広「学部レベルにおける通訳教育:位置づけとその目標」『長崎外国語大学論叢』(査読有) 15号 2012年12月 pp.115-126

[学会発表] (計4件)

- ① 南津佳広「逐次通訳におけるノート・テーキングの意味論と語用論」日本メディア英語学会 第3回年次大会 2013年11月10日(於:関西大学)
- ② Yoshihiro Minamitsu “Semantics and Pragmatics in Note-taking during Consecutive Interpreting” Interpreting and Translation Research Institute & Korean Association of Translation Studies International Conference 2013年10月18日 (at Han Koku University of Foreign Studies, South Korea)

- ③ 南津佳広「同時通訳訓練を通じたメタ言語力の養成」第41回九州英語教育学会長崎研究大会 シンポジウム「学校教育の中で英語運用力をいかに育てるか」2012年12月8日(於:長崎外国語大学)
- ④ 友野百枝・宮元友之・南津佳広「学部通訳教育における多面的指導アプローチ—通訳入門テキストの開発」日本通訳学会 第13回年次大会 2012年9月8日(於 京都橘大学)

[図書] (計1件)

- ① 友野百枝・宮元友之・南津佳広(大阪教育図書)『通訳学101』 2012年9月

[その他] (計1件)

- ① 南津佳広「捜査通訳におけるノート・テーキング」長崎県警 捜査通訳講習会 2013年2月(於:長崎県警)